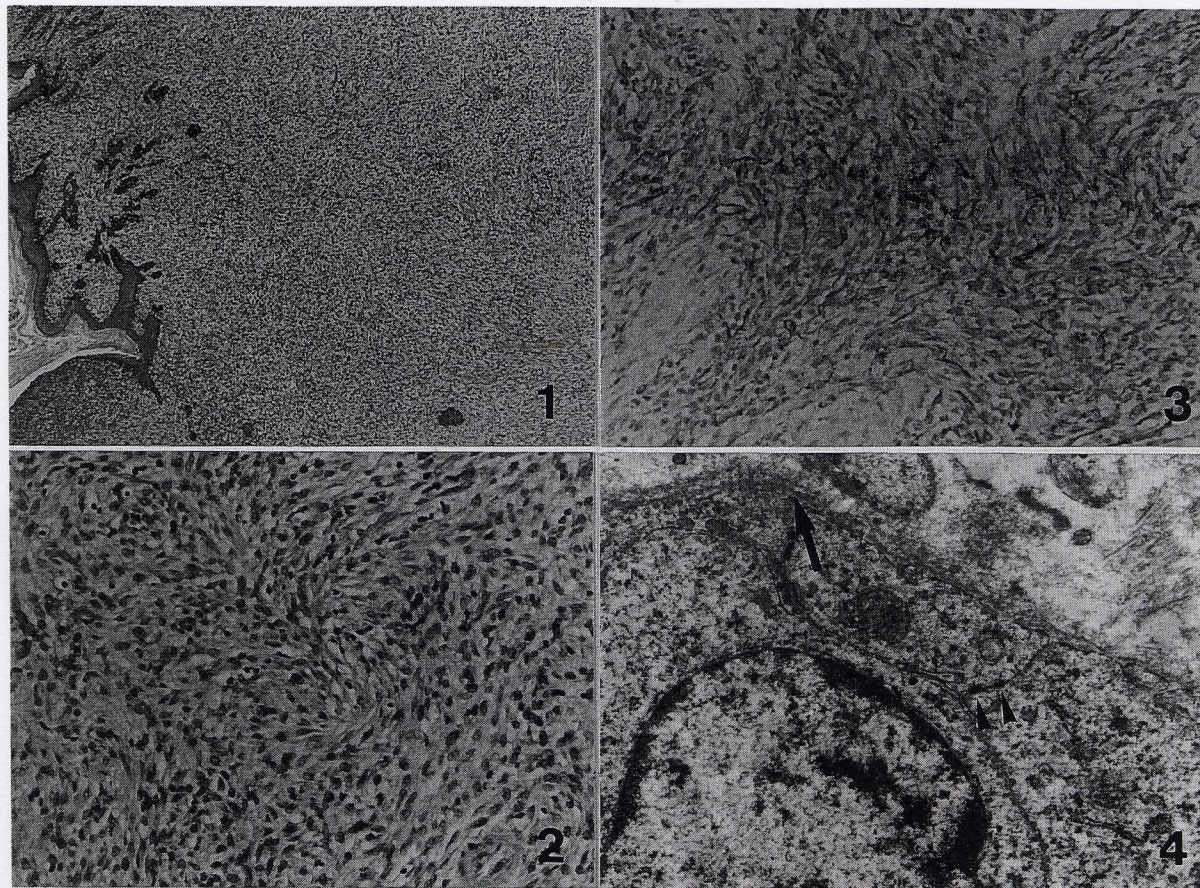


# ラットの胃腫瘍

日本生物科学研究所出題 第34回獣医病理学研修会標本No.615



**動物：**Fischer344/DuCrjラット，雌，109週齢。

**臨床事項：**本例は当所で長期飼育試験に供され，109週齢時に剖検された。臨床的に，102週齢時に鼠径部被毛汚染が，剖検前週には口吻部被毛汚染が観察された。剖検時体重は223gであった。

**剖検所見：**胃全体の著しい腫大（4×3×2 cm）及び胃壁（胃底部）の硬化・肥厚。前胃部粘膜に乳頭状灰白色結節多発。その他，口吻部及び鼠径部被毛の黄褐色汚染，肝臓各葉に径1～3 mm大の黄白色斑の散発，右肺中葉の無気巢及び下垂体腫瘍が観察された。他の臓器に著変は認められなかった。

**組織所見：**前胃粘膜固有層から漿膜にわたって腫瘍細胞が増殖し（写真1，×40），前胃粘膜面では乳頭状結節を形成していた。腫瘍組織内では紡錘形から多形性の大小不同の細胞がび慢性，一部束状あるいは花むしろ状に配列していた（写真2，×200）。腫瘍細胞の細胞境界は不明瞭，細胞質は明調空胞状あるいは弱好酸性細線維状で，大小不同の卵円形から長円形の核を持ち，核内には少量のクロマチンが散在していた。と銀染色により個々の腫瘍細胞の周囲に繊細な好銀線維が証明されたが，P T A H染色に

より腫瘍細胞内の筋原線維は証明されなかった。免疫組織化学的に，腫瘍細胞はS-100蛋白，グリア線維性酸性蛋白（写真3，×200），ビメンチン陽性を示したが， $\alpha$ 平滑筋アクチン，ニューロフィラメント及びミエリン塩基性蛋白は陰性であった。肺に転移巣が認められた。

**電顕所見：**腫瘍細胞には不規則な細胞突起，細胞質内の直径約10 nmの中間径フィラメント，細胞の自由表面を囲む1～数層の基底膜構造（矢印）が認められ，隣接する細胞間にはまれに細胞接装置（矢頭）が観察された（写真4，×10,000）。

**考察：**ヒトの胃の間質に発生する腫瘍には平滑筋由来と神経原性腫瘍，即ち末梢神経鞘（Schwann細胞）由来の腫瘍が含まれることが明かとなってきた。本例は，光顕的に平滑筋由来腫瘍との鑑別は困難であるが電顕的及び免疫組織化学的特徴からSchwann細胞に由来する腫瘍と考えられた。ラットの神経鞘腫は細胞のpalisadingが組織学的特徴の一つと言われるが，本例にはこの所見は認められず，診断を困難とする一因と思われた。

**組織診断：**ラットの胃の悪性神経鞘腫。